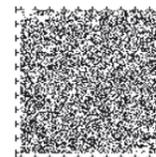
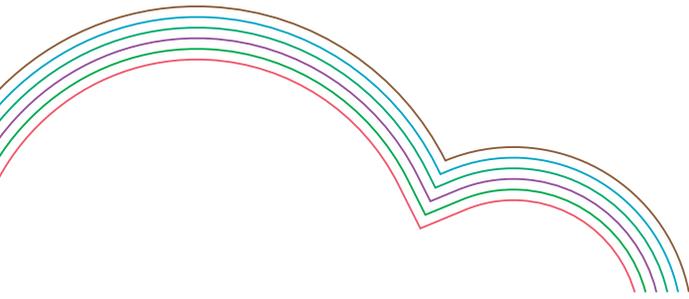




VISION 2025 LEGACY BOOK

世界陸上・デフリンピック
ビジョン2025 レガシーブック





はじめに

2025年に東京で開催された世界陸上とデフリンピックは、スポーツが持つ無限の力をあらためて示してくれました。

子供たちをはじめ多くの観客で埋め尽くされた会場。かつてない一体感に包まれる中、観客の応援にアスリートが躍動で応え、皆がスポーツの喜びや楽しさを肌で感じる。コロナ禍に無観客で開催された東京2020大会では叶わなかったシーンがようやく実現しました。

そして、障害の有無や、国籍、性別に関係なく、スポーツを通じて人々がつながる姿は、互いを認め、尊重し合う共生社会への歩みを加速させました。

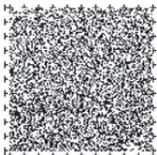
東京都はこれまで、国際スポーツ大会がもたらす大きな価値を踏まえ、両大会を通じて目指す姿を令和5年2月に「ビジョン2025」としてまとめ、「全ての人々が輝くインクルーシブな街・東京」の実現に貢献するという目標を掲げました。令和6年1月、令和7年1月には、その取組指針となる「アクションブック」「アクションブック バージョンアップ」を策定し、両大会を通じた取組や、その中で創出されるレガシーを示しながら、積極的に取組を進めてまいりました。

本書は、両大会の開催を経て、これまで「アクションブック」で示してきた様々な取組が、実際の大会を通じてどのように結実したのかをお示するとともに、これらの取組をレガシーとして未来の東京にどのようにつなげていくのかをとりまとめたものです。

東京2020大会、世界陸上、デフリンピックを通じて創出されたレガシーを磨き上げながら、“スポーツの力”で東京の未来を切り拓き、全ての人々が輝くインクルーシブな街・東京を実現するため、歩みを更に加速させてまいります。



令和8年1月30日 東京都知事 



目次

▶ 東京2025世界陸上・東京2025デフリンピックについて

P 4～ 数字でみる東京2025世界陸上・東京2025デフリンピック

P 6 両大会の開催までの道のり

▶ VISION2025 — 両大会を通じた取組とその成果 —

P 8～ 「ビジョン2025」について（両大会がもたらす価値、都が目指す姿、具体的な取組指針）

P10～ 推しスポーツProject

P13～ みんなが つながる Action 1 「大事な情報、伝える工夫」 Action 2 「デジタルで拓く東京の未来」

P19～ 世界の人々が 出会う Action 3 「芸術文化に触れ、感じる」 Action 4 「世界に東京の魅力をPR」

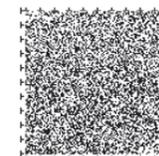
P25～ こどもたちが 夢をみる Action 5 「2025 for キッズ」 Action 6 「2025 with キッズ」

P33～ 未来へ つなぐ Action 7 「みんなで守る、みんなの環境」 Action 8 「共に生きる未来を創る」

P39～ みんなで 創る Action 9 「Make it together 2025」 Action10 「知って、楽しんで、応援しよう！」

▶ TOKYO FORWARD 2025 — 両大会を通じて創出されたレガシー —

P46～ 両大会を通じて創出されたレガシーと今後の取組の方向性



数字で見る 東京2025世界陸上

193か国・地域
+難民選手団
1,992人
参加国・アスリート数

31.7%
毎分視聴率最高値
男子 4x100mリレー

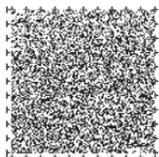
79か国
約860人
メディア人数

約62万人
総入場者数

7,977万人
大会期間9日間の
累計視聴人数 (TBS)

約1,300万回
HPのアクセス数
(World Athletics HP)

7億回超
70万人増
動画視聴・フォロワー数
(World Athletics SNS アカウント)



100th Anniversary

数字で見る 東京2025デフリンピック

79か国・地域等
約2,800人
参加国・アスリート数
※2025年12月時点

100周年
記念すべき大会
日本初開催

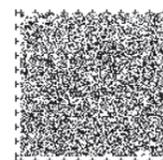
2,481媒体
3,976人
全競技会場
メディア取材数

約33万人
総入場者数
競技会場・
デフリンピックスクエア

62件
新たに生まれた
デフリンピック新記録
※2025年12月時点

51個
日本選手団が獲得したメダル数
(過去最多)

約324万回
競技動画再生数
※2025年11月27日15時時点



両大会の開催までの道のり



東京2025世界陸上競技選手権大会

2022年 7 月 東京が開催地に決定

2023年 7 月 世界陸上財団と東京都が開催に向けた基本協定を締結

2023年11月 世界陸上財団が開催基本計画を策定

2025年 9 月 東京2025世界陸上開催



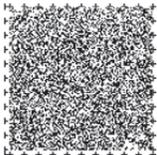
第25回夏季デフリンピック競技大会 東京2025

2022年 9 月 東京が開催地に決定

2023年 3 月 全日本ろうあ連盟と東京都が大会の準備・運営に関する基本協定を締結

2023年11月 全日本ろうあ連盟、東京都及び東京都スポーツ文化事業団が開催基本計画を策定

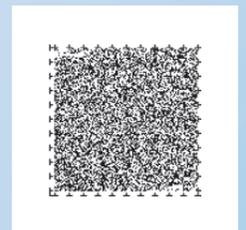
2025年11月 東京2025デフリンピック開催



vision2025

VISION2025

両大会を通じた取組とその成果



多くの価値をもたらす両大会の開催を、東京がステップアップする契機とし、 スポーツの力で未来を切り拓いていく

両大会がもたらす価値



東京2025世界陸上大会ロゴ

世界陸上競技選手権大会

世界のトップアスリートが集う陸上競技の祭典

- ▶ 世界最高レベルの熱戦がスポーツの喜びや楽しさを届ける
- ▶ 約10億人が視聴する世界陸上は、全世界に都市の魅力を発信する好機



TOKYO 2025
25TH SUMMER DEAFLYMPICS

東京2025デフリンピック大会エンブレム

デフリンピック

デフアスリートによる国際総合スポーツ競技大会

- ▶ 障害の有無などにかかわらず、誰もがスポーツを楽しむ素晴らしさを伝える
- ▶ 互いの違いを認め、尊重し合う社会への歩みが加速



両大会を通じて目指す姿を「ビジョン2025」として示すとともに、 その実現に向けた具体的な取組指針として「アクションブック」を策定し、様々な取組を推進

●ビジョン2025 (令和4年度)

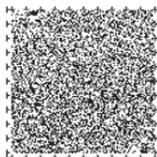


- ・都の長期戦略を踏まえ両大会を通じて目指す姿をまとめた基本方針
- ・「全ての人々が輝くインクルーシブな街・東京」の実現に貢献することを目標として掲げるとともに、5つの取組の柱を設定

●アクションブック (令和5年度・令和6年度)



- ・ビジョン2025の実現に向けた具体的な取組指針
- ・「3つのConcept」と「Sportsプロジェクト+10のAction」を設定 (p.9)



全ての人々が輝くインクルーシブな街・東京へ

3つのConcept

- ▶ 東京2020大会のレガシーを継承・発展
- ▶ 両大会一体となってウェルネスの向上や社会変革を推進
- ▶ 2025年を機に、東京に新たなレガシーを創出



環境先進都市への歩み



ボランティア文化のさらなる根付き

Sportsプロジェクト — 両大会を機にウェルネスを向上 —

+

▶ スポーツの価値を再認識  推しスポーツProjectの展開

10のAction — 両大会を社会変革の推進力に —

▶ みんなが つながる



Action 1
大事な情報、伝える工夫



Action 2
デジタルで拓く東京の未来

▶ 世界の人々が 出会う



Action 3
芸術文化に触れ、感じる



Action 4
世界に東京の魅力をPR

▶ こどもたちが 夢をみる



Action 5
2025 for キッズ



Action 6
2025 with キッズ

▶ 未来へ つなぐ



Action 7
みんなで守る、みんなの環境



Action 8
共に生きる未来を創る

▶ みんなで 創る



Action 9
Make it together 2025



Action 10
知って、楽しんで、応援しよう!



スポーツの価値を再認識 推しスポーツProject



プロジェクトの概要

- ▶ 世界陸上・デフリンピックの開催を機に、スポーツを「する・みる・支える・応援する」の視点から、様々なスポーツに親しむ機会を創出
- ▶ 「都民一人ひとりの好みや特性に合ったスポーツの楽しさ（推しスポーツ）」の発見を支援

「推しスポーツProject」公式ロゴマーク



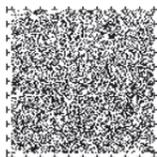
- 「様々なスポーツの中から推しスポーツを見つけよう」という事業趣旨をイメージ
- 東京都スポーツ推進大使「ゆりーと」を中心に、様々なスポーツ（パラスポーツ含め18競技）のイラストで構成

参画人数

推しスポーツProjectに参画した人数※ 約300万人

世界陸上・デフリンピックで気運が盛り上がる中、
様々なスポーツに参加

スポーツの楽しさを知り、継続的にかかわることで、
心身の健康や生き生きとした暮らしの実現に寄与



※東京都や関係団体等が実施したスポーツイベント等に参加した人数（令和6年4月～令和7年11月の集計人数）

※世界陸上・デフリンピックの入場者数（世界陸上：約62万人、デフリンピック：約33万人）を含む。

※都立スポーツ施設の利用貸出事業の利用者数は含まない。

※大会名称の記載について：本頁以降、「東京2025世界陸上競技選手権大会」を「世界陸上」、
「第25回夏季デフリンピック競技大会 東京2025」を「デフリンピック」と記載します。

TOWARD2025 (取組と実績)

「推しスポーツ」の発見・実施を後押しする3つの取組

👉 子供たちに多様なスポーツ体験を!

■キッズスポーツプログラム

アスリートとの交流や子供(親子)向けスポーツ教室など、スポーツを体験できる機会を通じて、子供たちの成長を支援

【取組事例】

●見て、学んで、走りだせ!世界陸上リアル教室

都内小学生が、国立競技場で“本物”の雰囲気を感じ、アスリートから陸上競技の指導を受ける陸上教室を開催



1000分の1 マラソン (42.195メートル走)

●TOKYO FORWARD 2025

子供スポーツ体験教室

きこえない・きこえるにかかわらず、子供たちがアスリートと一緒にスポーツを楽しむ体験教室を実施



デフサッカー体験教室 with FC東京

👉 スポーツで、いつまでも健康に!

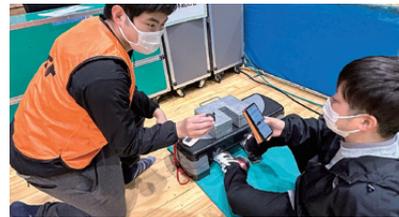
■健康長寿プログラム

体力測定に基づく運動指導や、シニアを対象とした交流会など、スポーツを通じた健康増進やフレイル予防、仲間づくりを促進

【取組事例】

●スポーツを通じた健康増進事業

健康への関心を高め、継続的なスポーツ実施につなげていくため、握力、反復横跳びなどの体力測定を実施



東京スポーツドック2024 ブース出展

●TOKYO縁ジョイ!

シニア健康スポーツフェスティバル

シニア世代の健康増進や交流促進を目的として、都内在住の59歳以上の方を対象に10競技のスポーツ大会を実施



ゲートボール大会

👉 スポーツの面白さを発見!

■Let's enjoy sports!

各種大会や体験会、試合観戦、ボランティアなど様々な機会を通じて、スポーツやレクリエーションに触れ、楽しさ・面白さを体感

【取組事例】

●スポーツフェスタ

東京体育館をはじめ都内の施設で、パラスポーツやレクリエーションスポーツを含め、様々なスポーツ体験プログラムを展開



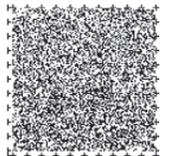
卓球体験

●BEYOND STADIUM

パラアスリートトークショーをはじめ、子供たちも楽しみながらパラスポーツへの理解を深められる体験イベントを開催



パラスポーツ体験
(車いすバスケットボール)



Topic

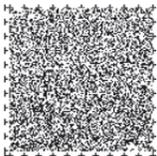
👉 スポーツ参画を促す、新たな応援のかたち

スポーツの参画方法には、「する」「みる」「支える」があり、「**応援する**」
こともスポーツへの入り口となる参画の方法といえます。

東京2025デフリンピックでは、**新たな応援のかたち**が生まれました。
一般的にスポーツの応援は声や聴覚=音に頼るものが多く、きこえない・
きこえにくいアスリートによる「デフスポーツ」の世界では、観客が応援を届
ける手段は限定的でした。そこで東京都は、ろう者やデフアスリートと共に、
“目でみる応援”「サインエール」を開発しました。

「サインエール」は、きこえない・きこえるにかかわらず全ての人がデフア
スリートに想いを届けることができる新たな応援スタイルです。実際に大会
では、国籍や障害の有無を超えて多くの観客がサインエールで選手を応援
し、会場全体が一体となり盛り上がりました。さらに今大会では、サインエ
ールに加え、最新の**デジタル技術を活用し、競技音を視覚や振動で
体感できる観戦スタイルも導入**するなど、スポーツの楽しみ方の幅が
広がる、新たな応援のかたちを示しました。

東京都は今後も、「する」「みる」「支える」「応援する」それぞれの形でス
ポーツに参画する機会を創出し、一人ひとりに合ったスポーツへのかかわり
を促すことで、都民の方々がスポーツを通じてウェルビーイングを高められ
るよう取り組んでいきます。



サインエール 基本要素

サインエールは日本手話言語をベースに、複数の動きを組み合わせ、
以下の基本要素で構成しています。

- 👉 **行け!**
- 👉 **大丈夫 勝つ!**
- 👉 **日本 メダルをつかみ取れ!**

基本要素の
動画はこちら▶

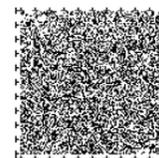


※ 「行け!」「大丈夫 勝つ!」等はあくまでもネーミングとしてつけたものであり、
直接的に日本の手話言語の意味を示すものではありません。

みんなが つながる

海外から多くの選手・観客が訪れる両大会を契機に、「いつでも・どこでも・誰とでもつながる街・東京」の実現を目指し、街中の情報アクセシビリティ環境の整備や、デジタル技術を活用したユニバーサルコミュニケーションの促進に取り組みました。

- ▶ Action 1 「大事な情報、伝える工夫」
- ▶ Action 2 「デジタルで拓く東京の未来」





まちの情報バリアフリーが進展

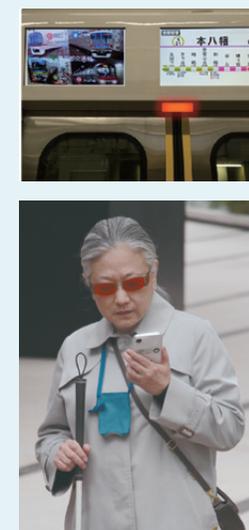
誰もがより簡単に必要な情報を受け取れる社会の実現に向けて、大会における情報保障の充実に取り組むとともに、公共施設等における環境整備や、アクセシビリティ向上への社会的気運の醸成につながる取組等を推進。多様な人が集い、情報保障への関心が高まる大会を契機として、各種施設でのユニバーサルコミュニケーション (UC) 技術等の活用が広がるなど、街中における情報バリアフリーの進展につなげた。



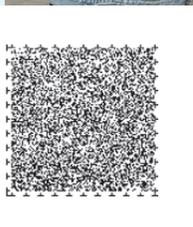
大会における情報保障を充実



街中における情報保障を推進



スポーツ施設や公園、駅などに情報保障機器を導入するなど、誰もが利用しやすい環境整備を推進



両大会における情報保障として、デジタル技術や手話言語等での対応を充実



様々な施設や団体と連携したキャンペーンを展開し、アクセシビリティ向上の気運を高めた

TOWARD2025 (取組と実績)

両大会における情報保障

■ UC技術の活用

- 両大会の全競技会場において、透明ディスプレイやタブレットを活用した多言語テキストによる案内や、会場設置のビジョン及び観客等のスマートフォンへの場内アナウンス・競技案内等の多言語テキスト表示等を実施



■ 「ユニバーサル・チャットボード」の制作・活用

- 指差しでコミュニケーションがとれるツール「ユニバーサル・チャットボード」を制作。競技会場のほか、ホテル、飲食店等にも配布し、様々な場面でのコミュニケーションに活用



■ デフリンピックに向けた国際手話人材等の育成

- デフリンピックやその後の活躍を見据え、都内の国際手話人口の裾野拡大を図るため、東京都国際手話普及促進事業を実施し、令和5年度 172人、令和6年度 144人の国際手話講習会受講費用を助成。また、助成者等を対象に、外国人との国際手話によるコミュニケーションを体験し、スキルアップを図る国際手話体験会を実施
- ▶助成者等はデフリンピックにおいて、国際手話通訳やボランティアとして活躍
- デフリンピックの全ボランティア活動者に対して、手話言語研修・ろう者の文化等理解研修を実施
- ボランティアの約半数が手話言語を用いて活動したほか、活動場所に応じてUC機器を活用し、きこえない・きこえるにかかわらず様々な方との円滑なコミュニケーションを実現



街中における情報保障

■ 公共施設等における環境整備

- デフリンピックの競技会場となった都立スポーツ施設全6施設（9競技の会場）に、アクセシビリティ設備として光警報装置や避難口誘導灯、集団補聴設備を整備
- 都営地下鉄において、駅へUC技術を導入したほか、車内ドア開閉表示灯の設置拡大を推進
- 都立公園における情報保障のケーススタディとして、デフリンピック競技会場の日比谷公園にUC技術を導入
- 障害のある人などのコミュニケーションを支援するスマホアプリを活用したスマートサービスの実証を実施し、アプリの有用性や活用可能性の検討を推進
- 都営施設において、デジタル技術を活用した遠隔手話通訳を実施し、きこえない人への情報保障を充実



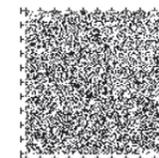
■ 「オールウェルカムTOKYO～デフ・スペシャル～」の展開

- 国内外から多くのデフアスリートや観客が東京に集う機会を捉え、様々な団体と連携し、都立施設や民間施設において、きこえない・きこえにくい方をおもてなしする「オールウェルカムTOKYO ～デフ・スペシャル～」を実施。手話言語通訳付き動画による施設紹介、音声が多言語で字幕表示する透明ディスプレイやタブレットなどのUC技術を活用した案内等の取組を通じて、東京のアクセシビリティを向上させ、共生社会実現に向けた社会的気運を醸成



(連携施設における主な取組事例)

上野動物園	「日本語言語通訳付きの動物解説ガイド」の実施や「手話言語通訳付きの施設紹介動画」の放映
東京地下鉄(株) 全駅	全駅に「みえるアナウンス(駅構内アナウンスをお客様のスマホに多言語で文字化できるサービス)」を設置
東京日比谷ミッドタウン	インフォメーションで「透明ディスプレイ」、27の飲食店等テナントで「タブレット」を活用
選手等の宿泊施設	フロント等において、「タブレット」や「ユニバーサル・チャットボード」、遠隔手話通訳サービスを活用





新たなコミュニケーション技術の普及が加速

デジタル技術を活用したユニバーサルコミュニケーション (UC) を促進するため、大会等様々な場面でUC技術を活用し、その有用性を発信するとともに、都有施設や鉄道駅などでの技術導入を推進。UC技術の社会的認知が高まり、街中での実装も進展するなど、UC技術の社会普及を促進した。



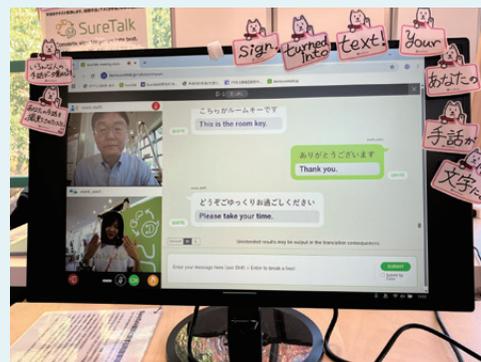
UC技術の有用性を広く社会へ発信



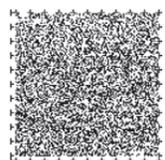
©(公財)東京都スポーツ文化事業団



©(公財)東京都スポーツ文化事業団



両大会やイベント、展示会など様々な場面で技術を活用し、PR 多くの人がUC技術に触れ、有用性を体感した



UC技術の社会実装を促進

都有施設においてUC技術の活用を進めるとともに、区市町村や鉄道駅等での技術活用を促進



TOWARD2025 (取組と実績)

UC技術の有用性をPR

民間企業等と連携した新たな技術の開発・活用

- ・「音が見える、音を感じる競技会場の実現」をテーマに、スタートアップによるピッチコンテストを実施。優勝企業等と連携し、技術開発を促進
- ・開発した技術を含む様々な技術を各種競技大会で実証
- ・デフリンピック期間中、最新技術を活用し、誰もが“音が見える”“音を感じる”新しい競技観戦を提供



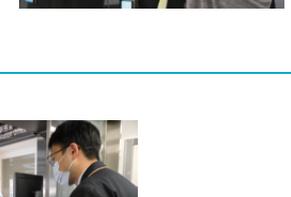
©(公財)東京都スポーツ文化事業団

様々な機会を捉えた技術の発信、体験機会の提供

- ・国内最大級のデジタルイノベーションの総合展「CEATEC」やアジア最大級のグローバルイノベーションカンファレンス「SusHi Tech Tokyo」等に出席し、技術をPR
- ・気運醸成イベントにおいて、様々なデジタル技術の体験コンテンツを展開
- ・デジタル技術を活用して、きこえない・きこえるにかかわらず誰もがつながることができるコンセプトカフェ「みるカフェ」を2年連続で開催
- ・デフリンピック大会時、選手等の交流拠点となる「デフリンピックスクエア」において、スタートアップ等と連携し、UC技術等を体感できる「みるTech」を開催。約36,000人が来場
- ・国際手話・アメリカ手話言語を多言語テキストに変換表示できる技術の開発を促進、選手宿泊ホテル等で活用
- ・「西新宿先端サービス実装・産官学コンソーシアム」において、スマートグラス上に発話内容などを字幕表示する技術を開発し、都庁展望台等で実証



©(公財)東京都スポーツ文化事業団



誰もが楽しめる新しい競技観戦【デフリンピック】

卓球・バドミントンの競技音を擬音で大型ビジョン等に表示



スマートグラス上に競技解説などを字幕表示しながら競技観戦



©(公財)東京都スポーツ文化事業団

柔道の投げ技などで発生する競技音を、装着したデバイスの振動で体感



©(公財)東京都スポーツ文化事業団

UC技術の社会実装の促進

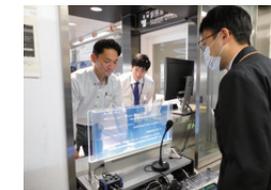
都府施設等での活用

- ・都庁舎をはじめとする都府施設において、音声情報を多言語で表示するディスプレイを設置。令和6年度に38の施設に導入し、令和7年度には110の施設に設置を拡大
- ・都営地下鉄において、都庁前駅や国立競技場駅、六本木駅など15駅にUC技術を導入



公共施設等への導入支援

- ・区市町村や鉄道駅におけるUC技術の導入を支援。区市町村6自治体18箇所、鉄道駅6社172駅が新規導入(令和6年度)



Voice



公益財団法人 日本財団 職員
東京2025デフリンピック応援アンバサダー

川俣 郁美 氏

日本財団にてアジアのろう者支援事業のコーディネーター等を担当。大会アンバサダーとして手話言語やデフリンピックの魅力のPRに尽力。デフリンピック開閉会式では国際手話で司会を務めた。

👉 “つながり” が「違いは素敵である」と気づくきっかけに

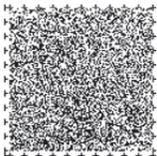
大会の素晴らしさだけでなく、“ろう・難聴であることは「かわいそう」「失った」のではなく、ろう・難聴だからこそ気づける視点、社会に貢献できる点がある”、“工夫次第で同じように楽しむことができる”、“違いは素敵である”ことを伝えたいと思い活動をしました。

不便さだけではなく、手話言語やデフリンピックの面白さ、前向きな工夫を紹介するよう努めながら活動しました。小学校での出前授業の時には、私を「ろう者」「きこえない人」といった属性で捉える前に、純粹に一人の人として子供たちが興味をもって「好きな色は？」といった質問を投げかけてくれたり、覚えてたの手話言語や身振りで元気よく話しかけてくれて、心が温かくなったことを覚えています。

また、大会では手話言語通訳付き生配信やユニバーサルコミュニケーションの導入が進み、様々な環境整備が行われました。そして街中での大会や手話言語のPRを通じて、社会に対してろう・難聴の存在を自然に気づかせるきっかけとなり、心理的なバリアが軽減され、社会の一員として受け入れられているという誇りを感じました。

スポーツには言語や文化の違いを超えて感動を共有できる力があります。「デフリンピック」という舞台を通じて、多様な人が参加できるよう様々な工夫が取り入れられ、大勢の人がデフスポーツや、ろう・難聴、手話言語、さらにはまだ残る社会課題に気づくきっかけとなりました。

社会全体・日本全体で、きこえない・きこえるにかかわらず、誰もがなりたい夢をめざせる社会に向けた取り組みがさらに進んでいくことを願っています。



株式会社方角 代表取締役

方山 れいこ 氏

大会で活用したUC技術「ミルオト」のプロデューサー。スタートアップピッチイベント「UPGRADE with TOKYO」において「音が見える・音を感じる競技会場の実現」をテーマに優勝に輝き、都と連携して、デフリンピックに向けた技術開発等を推進

👉 大会を通じて広まったUC技術の可能性

以前、知り合いのきこえない・きこえにくい人から「スポーツ観戦のとき、みんなが盛り上がっている理由がわからない」という声を聞いたことがありました。ニュースには字幕や手話言語が付くようになりましたが、生活はそれだけではありません。“絶対必要ではないけれど、ないと困る”。そうしたエンターテインメントの世界にも情報保障が必要なのではないかと考え、スポーツ観戦の音を可視化するユニバーサルコミュニケーション (UC) 技術の開発に取り組みました。

大会での活用に向けては、各種競技大会やイベントなど様々な場所で何度も実証を行いました。卓球台を設置して実演を行ったショーケースでは、多くの方の目に留まり、「自分の出す音がどんな音なのかを見てみたい」と体験される方もいらっしゃいました。実証の機会を通じて多くの人に技術に触れていただくことができました。

大会本番では、卓球とバドミントンにおいてミルオトを実装し、打球音、歓声、拍手の音を可視化しました。音の可視化により観戦の楽しさや会場の一体感が広がっていく様子を目の前で見ることができ、“情報保障は最低限の配慮ではなく、体験そのものを拡張しうる”という手応えを得ることができました。また、大会時には多くのメディアに取材していただき、UC技術を必要としている方がいること、そしてそのソリューションが“ある”ということが様々な媒体を通して社会に伝わったと感じています。

情報が目の前にあるけれどそこにアクセスできない方はたくさんいらっしゃいます。そういった方々が気軽にアクセスできるような社会の変化を期待するとともに、我々としてもこの分野は引き続きチャレンジしていきたいと考えています。

世界の人々が 出会う

世界中から多くの人々が東京を訪れ、注目が集まる両大会の開催を契機に、「何度でも訪れたい東京」を目指し、東京の多彩な魅力を世界に発信しました。

- ▶ Action 3 「芸術文化に触れ、感じる」
- ▶ Action 4 「世界に東京の魅力をPR」





誰もが芸術文化を楽しめる環境づくりが進展

両大会に合わせ、文化プログラムを展開するとともに、芸術文化へのアクセシビリティ向上の取組を推進。大会を訪れた人など多様な人々に東京の芸術文化の魅力をお届けするとともに、国籍や障害の有無にかかわらず、誰もが芸術文化を楽しめる環境づくりが進展した。



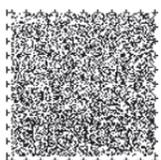
文化プログラムを展開し、東京の芸術文化をPR

文化プログラム「TOKYO わっしょい」に約11.3万人が参加



©(公財)東京都スポーツ文化事業団

国内外問わず、多くの人々が芸術文化に触れ、その魅力を体感した



誰もが芸術文化を楽しめる環境整備を推進

江戸東京たても園 園内全体視察模型 ©中島祐輔



全都立文化施設の情報保障の拡充、民間の文化事業に助成を実施するなど、誰もが芸術文化を楽しめる環境を整えた

TOWARD2025 (取組と実績)

東京の芸術文化の魅力を発信

■ [TOKYO FORWARD 2025 文化プログラム]

・東京2020大会の文化プログラムのレガシーを継承・発展させた3つのアートプロジェクトを展開。東京の持つ芸術文化の魅力を発信し大会を盛り上げるとともに、共生社会実現に向けた歩みを加速

◎ [TOKYO わっしょい] →Voice(p.24)

東京で親しまれている様々な祭りの見どころを凝縮したパフォーマンスを披露。年齢や国籍、障害の有無を超え誰もが気軽に参加し、芸術文化を楽しめる祭り体験を提供し、一体感を創出。約11.3万人が参加



◎ [黙るな 動け 呼吸しろ]

言葉や文化が異なるろう者・聴者が交流し、そのプロセスをベースに創り出されていくオリジナルストーリーを上演。その創作過程も記録し、発信



◎ [TRAIN TRAIN TRAIN]

東京2020パラリンピック開会式のキャスト・スタッフに新たな仲間を加えたチームで、障害の有無を問わず、多様な個性が輝く新作舞台を上演。誰もが作品を楽しめるようアクセシビリティ対応を充実



誰もが芸術文化を楽しめる環境を整備

■ 都立文化施設や文化事業の環境整備

- ・鑑賞を支援するツールの導入や、情報保障付きプログラムの拡充など、鑑賞サポートの取組を都立文化施設全10施設(休館中1施設含む)で実施
- ・手話言語を使った鑑賞体験をサポートできる人材を育成する研修プログラムを令和6年度から開始



■ 民間団体等のアクセシビリティ向上の取組を支援

- ・民間文化施設などでの鑑賞サポート提供への助成事業を令和6年度に創設し、47団体、62事業に助成。令和7年度には両大会の開催に合わせ機運醸成枠を新設するなどの助成を拡充
- ・鑑賞サポートの提供ノウハウに関する講座の開設や相談対応を実施



■ 江戸文化のプロモーション

- ・世界陸上マラソンコース沿道に浮世絵のフラッグを掲出し、街を装飾
- ・世界陸上の競技会場(国立競技場)内の大型ビジョン等で浮世絵を活用したPR映像を放映
- ・世界陸上の期間中、国立競技場外構部にて、江戸の魅力を感じられるステージパフォーマンスを実施
- ・デフリンピックスクエア内にEdo Tokyoのフォトパネルを設置するとともに、提灯リコグニションの中にロゴ入り提灯を設置



■ 大会関連施設での芸術文化鑑賞体験

- ・大会関係者などに江戸・東京の芸術文化体験、鑑賞機会を提供。東京の魅力を効果的に世界へ発信



大会関連施設での芸術文化鑑賞体験参加者の声

茶道体験で心が落ち着き、集中して時間が止まる感覚はスポーツに似ていました。日本が大好きで、東京に来られてうれしく、競技後にきれいな着物を着て明るい気持ちになりました。

■ [オールウェルカムTOKYO]

- ・両大会の開催時期を中心とした期間、アクセシビリティ向上の機運を一層高めることを目的としたキャンペーンを展開。芸術文化を起点に多様な主体と連携し、鑑賞・参画機会の増加や鑑賞サポート等に取り組み、一体的に発信



鑑賞サポート利用者の声

好きな俳優の舞台を見に行きたくても、字幕がなくて諦めたこと、内容が分からず楽しめなかったことが多いので、字幕を使用して他のお客様と同じタイミングで笑ったり感動できたりして嬉しかった。





“東京ブランド” を世界に発信・浸透

大会の様々な場面を通じて世界に東京の多彩な魅力を発信するとともに、選手や大会関係者など多くの来訪者に東京ならではのおもてなしを提供。世界の注目が集まる両大会を活用し、効果的にプロモーションを行い、東京ブランドを世界に広めた。

両大会を活用し、東京を効果的にプロモーション



競技会場へのTokyo Tokyoを活用した広告掲出や、東京の魅力を感じられる場所をマラソンのコースに設定するなど、テレビ放送等を通じて効果的にプロモーション



©WCH Tokyo 25



東京ならではのおもてなしを通じて魅力を発信



©(公財)東京都スポーツ文化事業団



海外の選手や大会関係者、メディア等を、食や観光、伝統文化といった東京の多彩な魅力でおもてなし。多くの来訪者に東京の魅力を発信した

TOWARD2025 (取組と実績)

東京の持つ多彩な魅力の発信

■ 様々な場面で東京をプロモーション

- ・世界陸上の競技会場等にTokyo Tokyoのアイコンを活用した広告を掲出
- ・東京都の観光PRサイト「JAPAN SPORTS JOURNEY」に両大会の特設ページを新設
- ・オンライン広告や機内誌、SNSなど多様な媒体を通じた海外プロモーションを展開
- ・都庁舎等で大会をテーマとしたライトアップを実施
- ・日本の伝統と最先端テクノロジーを掛け合わせた未来の山車「ツナグルマ」を両大会で活用



■ 大会に東京の魅力を取り入れ発信

- ・世界陸上の大会メインカラーに「東京らしさ」や「気品」、「多様性」を表現した「江戸紫」を採用
- ・世界陸上のマラソン・競歩について、東京駅や明治神宮外苑など歴史や文化などの東京の魅力を感じられるコースを設定
- ・世界陸上の暑さ対策でスタートアップと協働し、その技術力を発信
- ・世界陸上では前夜祭イベントの会場として、デフリンピックではマラソンのコースとして、都心部を通るKK線(旧東京高速道路)を利活用。KK線の再生方針である「世界から注目される東京の観光拠点」の実現に向け、効果的にPR



● KK線(旧東京高速道路)の再生

都心部に位置する全長約2kmの自動車専用の道路(KK線)は、首都高速道路の新たな都心環状ルート(新京橋連絡路)の整備により、その役割が大きく低下することとなった。今後、KK線は世界から注目される観光拠点を目指し、ウォークアブルなまちづくりのシンボルとして再生していく。

“東京ならではの”おもてなし

■ 大会関係者に向けたおもてなし

- ・海外の選手や関係者、メディアを対象に、東京の観光名所を巡るツアーを実施
- ・着物の着付けや折り紙の体験など日本の文化を体験できる取組を実施
- ・世界陸上において、メダリスト副賞として、Tokyo Tokyoのアイコンが入った「ぐい呑み」を贈呈
- ・世界陸上の大会関係者や各国の要人が集まる会議等において、東京産食材を提供。また、島しょ部の紹介として、島酒の試飲や特産品の紹介を実施
- ・デフリンピックの各国選手団の団長が集まる会議において、東京産食材の提供、都伝統工芸品・Tokyo Tokyoグッズの贈呈を実施
- ・大会の記念品として、Tokyo Tokyoのアイコンが入ったステンレスボトルをデフリンピック出場選手等約6,000人に贈呈
- ・両大会の選手、関係者、メディア、ボランティアに対し、東京の魅力を発信するギフトとして銭湯手ぬぐい等を配布



■ 街全体でおもてなし

- ・Tokyo Tokyoと両大会のキービジュアルを組み合わせたデザインを制作し、主要会場最寄駅や空港、PR効果の高い鉄道駅などを装飾
- ・世界陸上の大会期間中、国立競技場周辺で大会を盛り上げるイベントを開催。国内外から大会に訪れる人々へ、江戸・東京の魅力を発信
- ・競技会場や大会の文化発信拠点などにPRブースを設置し、東京の観光情報やアニメ文化などの様々な魅力を紹介
- ・多言語対応等を行うインバウンド対応モデル銭湯への支援を行い、外国人の受入体制を整備するとともに、競技会場等での割引入浴券付きリーフレットの配布、大会関連施設でのPRなどを実施し、国内外の観光客等の銭湯利用を促進



Voice



公益財団法人東京都歴史文化事業団
アーツカウンシル東京 事業部事業推進課長

湯川 説子 氏

東京都と共に「TOKYO わっしょい」を主催。関係機関と連携し、祭りや芸能団体等への出演依頼や事業運営にあたる。

👉 芸術文化の力で世界陸上を彩る、東京駅前の3日間

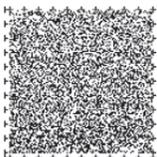
東京駅と皇居前を結ぶ行幸通りを会場に、9月12日(金)から14日(日)まで開催した「TOKYO わっしょい」。本事業は、①東京が持つ芸術文化の魅力を発信 ②共生社会の実現に向けた歩みの加速 ③芸術文化の力で世界陸上を盛り上げる、の3つを目的として、年齢・国籍・障害の有無を超え、東京ならではの独自性や多様性をもつ祭りや芸術文化、江戸文化の魅力に触れ、共に交流のできるプログラムを展開しました。

様々な祭り、伝統芸能のパフォーマンスに加え、気軽に伝統文化や江戸文化に触れられる体験ブースを設置し、リアルタイムで字幕表示するパフォーマンス字幕や、手話言語通訳者の解説などを整備するなど、誰もが楽しめる空間を実現しました。

会場が東京駅前だったことで普段は芸術文化に触れる機会が少ないという方々の参加も多く、3日間で約11万3千人もの人々に来場していただけました。子供から高齢者までの幅広い世代が訪れ、外国人観光客の姿も多く見受けられました。また、報道メディアやSNS上での情報発信・拡散のおかげで、会場を訪れることができなかつた方々にも芸術文化の魅力が伝わったと感じています。

参加者からは「東京駅前という場所でいろいろなお祭りが見られてよかった」、「初めて見る伝統芸能に興味を持った」などの声が数多く寄せられ、本事業が東京の多彩な芸術文化を知っていただく貴重な場となれたことを実感しました。

この事業を通じ、国や世代を超えた幅広い層の参加と、多様なニーズに応える取組が、芸術文化の裾野を広げるうえで重要であると感じ、文化の多様性と共生の大切さを改めて認識しました。今後も東京の多彩な芸術文化の魅力を国内外に発信していき、文化振興や地域活性化に活かしたいと思います。



Topic

👉 海外選手を通じて広がる東京の魅力

大会期間中、多くの海外選手が東京での滞在を楽しみ、その様子をSNS等で発信しました。競技だけでなく、街並みや食、住民との交流など、選手たちが日常の中で感じた魅力が、写真や言葉とともに世界へと広がりました。ここでは、その一部をご紹介します。

🇸🇪 アルマンド・デュプランティス スウェーデン/男子棒高跳

東京2025世界陸上において世界新記録を樹立し金メダルを獲得。Instagramフォロワー数 約160万人*

「日本での時間を本当に楽しんでいます。今までの人生で最高の食事を味わいました。アジア料理は昔から好きでしたが、特に日本食は最高です。美味しい寿司や肉がたくさんあります。美味しいものをたくさん食べられるのは、いいですね!」

(出典：2025年9月15日 世界新記録樹立後の記者会見)

「ありがとう、東京」

▶ 大相撲観戦や日本食などを楽しむ様子の写真を投稿
34.2万いいね!※を記録

(出典：Instagram mondo_duplantis_2025年9月19日投稿)

🇺🇸 タラ・デイビス ウッドホール アメリカ合衆国/女子走幅跳

東京2025世界陸上において金メダルを獲得。Instagramフォロワー数 約91.5万人*

「東京を探索中」「(東京の素晴らしさを) 自分の目で見て実感しました。」

▶ 渋谷の観光スポット等を楽しむ様子の動画を投稿
79.6万回再生、3.5万いいね!※を記録

(出典：Instagram thewoodhalls_2025年9月10日投稿)

🇺🇸 サナ・バーネス アメリカ合衆国/女子走高跳

「料理はとても美味しく、みんな本当に親切で、世界最大の都市とは思えないほど街が静かです。」

▶ 日本到着時の空港や街中、「Edo Tokyo」の歓迎バナーを映した動画を投稿
(出典：Instagram louverturebarnes01_2025年9月15日投稿)

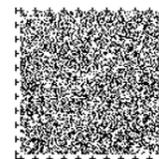
※2026年1月18日時点

こどもたちが 夢をみる

限界に挑戦するアスリートの姿は、時に子供たちに人生を変えるほどの感動を届けます。明日をつくる子供たちが、大会を通じて夢と希望に触れ、学び、成長できるよう、子供たちが大会に参画できる機会を幅広く創出しました。

▶ Action 5 「2025 for キッズ」

▶ Action 6 「2025 with キッズ」





スポーツの素晴らしさを次世代へと継承

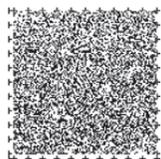
国際大会ならではのスポーツ体験や学びの機会を多くの子供たちに提供。特別な経験を通じて、子供たちがスポーツの楽しさ、素晴らしさに触れ、子供たちの「スポーツ好き」を育むとともに、共生社会について学び、考えるきっかけを創出した。



様々な取組で子供たちの「スポーツ好き」を醸成



国際大会ならではの体験機会等を幅広く創出
多くの子供たちにスポーツの楽しさ、素晴らしさを届けた



共生社会を学び、考えるきっかけを創出



大会を通じて多様性や共生社会への理解を深めた

TOWARD2025 (取組と実績)

▶ スポーツに触れ、親しむ機会を創出

■陸上競技等を紹介した冊子「スポーツドリル」

・世界陸上の見どころや、陸上競技種目の解説、子供たちが楽しみながら取り組めるトレーニングメニューを紹介した「スポーツドリル」を制作。HPで公開するほか、都内の全小学校4～6年生に冊子約34万部を配布



■バトンプロジェクト

・世界陸上を「こどもに夢を届ける大会」とするため、都内の全小学校約1,400校にリレー用のバトン（8本セット）を寄贈。バトンは各校の運動会や体育の授業等で活用
・キックオフイベントではアスリートによるバトン贈呈と特別授業を実施



■特設サイトに子供向けページを制作

・両大会の特設サイト「TOKYO FORWARD 2025」内に、アスリートや社会で活躍するきこえない人等のインタビューを子供向けにわかりやすくまとめて掲載



■国際大会ならではのスポーツ体験

- ・世界陸上の大会期間中、国立競技場で子供たちが“本物”の雰囲気を感じながら陸上競技の指導を受けられる体験プログラム「見て、学んで、走りだせ！世界陸上リアル教室」を実施。都内62校から約3,000人の子供が参加
- ・上記プログラムとは別に世界陸上の大会前にも、トラックでの短距離走を含む国立競技場特別スタジアムツアーを実施。都内延べ92校から約7,000人の子供が参加
- ・国立競技場への移動が困難な障害のある子供たちに、分身ロボットの遠隔操作を通じたりリモートでの国立競技場実走体験を提供。「見て、学んで、走りだせ！世界陸上リアル教室」に参加した小学生と交流
- ・ランニングアプリを使用して、好きな時間に好きなコースを走行し、全国どこからでも参加できるバーチャルランを実施し、夏休み期間に親子などでスポーツをする機会を創出。1,047人が参加



両大会及び関連取組でスポーツへの興味・関心が高まった子供

→ **76.5%** (東京都 こども都庁モニター調べ)



「世界陸上リアル教室」に参加した子供の声

実際にすごい選手が走っているところを走れて、とても走りやすかったし、いつも走るよりとても楽しかったです！

▶ 共生社会を考えるきっかけを提供

■学習ハンドブック「学ぼう！デフリンピック」

・デフリンピックや手話言語を漫画形式で学べる学習ハンドブックを制作。HPで公開するほか、令和6年度に都内の全小学4～6年生約34万人、令和7年度に新4年生約13万人に冊子を配布
・大会500日前などの節目に、都内小学校においてデフアスリート等による冊子を活用した特別授業を実施



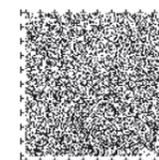
■デフアスリートとの交流イベント

・きこえない・きこえるにかかわらず、子供たちがアスリートと一緒にスポーツを楽しむ体験教室を実施



■学校で体験！世界陸上・デフリンピック

- ・聴覚障害やデフリンピックに関する映像教材を作成し、都内公立学校へ配信。公共施設のデジタルサイネージへ掲出するとともに、動画配信サービス上でも公開
- ・ろう学校にてデフアスリートを招いた競技体験や講演、特別授業などを実施
- ・「笑顔と学びの体験活動プロジェクト」では、両大会に関連するプログラムを提供し、希望する学校が実施





大会参画の経験が子どもたちの夢や自信を醸成

両大会が子供たちにとってかけがえのない思い出や経験となるよう、子供たちが大会に参画できる取組を幅広く展開。子供たちと共に大会を創り、盛り上げることを通じて、多くの夢や希望を届けるとともに、自信の醸成につなげた。



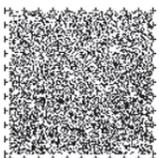
多くの子供たちが大会づくりに参画



多くの子供たちに競技観戦の機会を提供



自分たちの意見が
大会運営に反映される



©(公財)東京都スポーツ文化事業団

かけがえのない経験が子供たちの自信を育んだ



限界に挑戦するアスリートの姿が、子供たちに夢や希望を届けた



TOWARD2025 (取組と実績)

子供たちの大会への参画

■子供たちの意見を大会づくりに反映

<世界陸上>

- ・大会ロゴやメダルデザインに中高生のジュニアアスリートの意見を反映。デザイン選定に合わせて、子供向けのロゴ作成体験企画も実施
- ・マスコットデザインの開発に際し小学生とのワークショップを開催し、子供たちが描いたイラストを参考にして開発。オンラインでのネーミング投票も実施
- ・大会に向け、子供の実際の声やニーズを把握するため「こどもワークショップ」を開催。小中学生から出た意見を具体化し、大会の取組へ反映

<デフリンピック>

- ・大会エンブレムは、聴覚障害者・視覚障害者のための国立大学である筑波技術大学の学生がデザイン案を制作し、都内中高生の投票により決定
- ・メダルデザインは、全国の小中学生による投票で決定。全国から8万を超える投票があった



■大会運営参画

- ・両大会において、中高生が記者として、選手、関係者、イベントの取材を行い、取材内容をまとめて発信する「こども記者プログラム」を実施→Voice(p.31)
- ・世界陸上では、各種目のメダルセレモニー(表彰式)で、メダリストをステージ裏までエスコートする「バックステージナビゲーター」を実施。会場周辺区の中学生57人が参画
- ・デフリンピックでは、選手入場時のエスコートキッズやハイタッチキッズ、メダルセレモニーにおけるトレイベアラを都内や被災地等のろう学校の生徒が実施。計289人が参画



キッズアスレティックス【世界陸上】

陸上の力、体を動かすことを通じて、世界中の子供たちが、よりアクティブになり、スキルと自信を伸ばし、そして生涯にわたりスポーツに親しむことを促すワールドアスレティックス(WA)のプログラム。「こどもに夢を届ける大会」として東京2025世界陸上が認定された。



子供たちに夢と希望を届ける

■競技観戦招待

- ・臨場感あふれる会場での観戦を通じて、子供たちにスポーツの素晴らしさや夢と希望を届けるため、世界陸上では約4.9万人、デフリンピックでは約5万人の子供たち(引率者も含む)を競技観戦に招待
- ・また、被災地(岩手県・宮城県・福島県・石川県)の子供たち(引率者も含む)も、世界陸上では131人、デフリンピックでは136人招待
- ・デフリンピックでは都内の3~5歳児を対象とした観戦事業を企画・実施する区市町村を支援。4区市から537人が観戦

■応援メッセージ

- ・大会関連イベントなどで集めた子供たち等からのメッセージを両大会の選手に届けるとともに、競技会場の装飾などに活用。約3万件的応援メッセージが集まった



東京2025デフリンピック公式マスコット「ゆりーと」

競技観戦招待：参加した子供たちの声(デフリンピック)

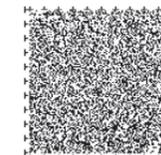
- ・声に出して応援するのがあたり前だと思っていたので、きこえにくい選手に応援ボードやサインエール等の、目でみえる応援をするのが初めてでおもしろかったです。
- ・耳がきこえない人と今よりも話せるように、もっと手話言語やサインエールについて調べたいと思いました。

競技観戦招待：参加した子供たちの声(世界陸上)

- ・会場の雰囲気や、そのもの大きさに驚きました。また、選手の思いが伝わりすごいと思いました。
- ・テレビで見るのとは違う、選手たちの全力を出す生き生きとした姿が印象に残りました。世界陸上を通して少しでもスポーツを身近に感じられるようになった気がします。



東京2025世界陸上マスコット「りくわん」



Voice



～元気にあいさつ キャリアと心をみがき、未来を拓く～
東京都立葛飾ろう学校

東京都立葛飾ろう学校長（都立ろう学校長会会長）

姫野 滋子 氏

デフリンピックに関連する取組や大会の運営補助などに積極的に参画。
 大会を共に創り上げた。

大会で得た学び、未来へつなぐ

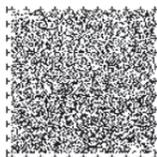
選ぶだけでは終わらせない！学びに広げるメダルデザイン投票

大会に関連した取組として印象に残っているのは、『デフリンピックメダルデザイン投票』です。本校ではこの取組を、聴覚障害への理解を深め、大会やデフスポーツへの子供たちの関心を高めることを目的として、大会前の令和6年10月に実施しました。投票の際にはICT機器を活用したほか、過去大会のメダルに実際に触れる体験や、グループワークによる意見交換の時間を設けました。こうした工夫を通じて、この投票活動を単なる“メダルデザインの選択”にとどめず、子供たちの主体的な学びを促す場へと発展させました。

この取組を通じて、子供たちは大会や障害者スポーツへの関心を高めるとともに、主体的・協働的に学ぶ姿勢や多様性を理解する力を育みました。実際に「デフリンピックについてもっと知りたくなった」という声や、「自分の意見をみんなと共有できて楽しかった」という感想が多く寄せられ、選択活動を子供たちの成長につなげることができたという点で、取組の目的に沿った大きな成果を実感しています。

実施した取組

- 国際手話の学習
- 映像教材『みんなで応援しよう！東京2025デフリンピック！』への出演
- デフリンピック開催500日前記念イベントでの参画
- デフリンピックメダルデザインへの投票
- デフリンピックメダルデザイン発表イベントへの参画
- FC東京と連携した聴覚障害の理解啓発イベントへの参画
- デフリンピックを契機とした清掃活動への参加
- デフリンピックでの大会運営補助及び応援観戦
 (エスコートキッズ・ハイタッチキッズ・トレイベアラール・サインエールなど)



デフリンピック メダルデザイン投票の様子



ハイタッチキッズの様子

誇りや自信を育んだ、社会とのつながり

全体を振り返ると、学校の中だけでなく社会とつながることができたのは、大会があったからこそだと思います。子供たちはこの機会を通じて、“自分たちの文化や言語（手話言語）を誇りに思う”気持ちを育みました。実際に本校が参加した聴覚障害理解啓発イベントでは、来場者に向けて自分たちの文化やコミュニケーション方法を工夫しながら積極的に発信し、その過程で自信を深めていく姿がとても印象的でした。

「きこえないことは“不便”なのではなく、社会を豊かにする多様性の一部である」。このことを、子供たちだけでなく私たち教職員も、大会や取組を通じて改めて実感しました。観戦や運営補助などを通じて、各国のきこえない・きこえにくい選手たちが世界を舞台に活躍する姿を間近で見ることができたことは、こうした気づきを得るうえでも大変貴重な経験だったと感じます。

大会で培った力、社会を切り拓く“礎”に

子供たちは大会や関連取組の中で主体性や協働性、多様性の理解、発信力などを育んでおり、その成長や変化はろう学校として非常に意義深いものでした。普段からコミュニケーションに壁を感じるがあった子供たちが、自分たちの文化などを自らの力で社会に発信し、大きな自信へとつなげていった姿は強く心に残るものでした。また、スポーツを通じて目にした“きこえない・きこえにくい人たちが世界で活躍する”姿も、子供たちが将来力強く生きていくための礎となったことでしょう。

子供たちには今回学んだ経験を糧に、“きこえない・きこえにくい”自分と向き合い、聴覚障害が“多様な人々と互いに尊重し合える価値ある違い”であることを実感してほしいと思います。今大会で学べた数多くのことは、将来の共生社会の担い手として生きる子供たちの未来を切り拓く大きな一歩となることでしょう。そして、これからの学校生活や社会参画の場において『自分』を積極的に表現し、互いの違いを理解しながら他者と『共に』歩んでいってほしいと願っています。

Voice



【世界陸上】こども記者プログラム参加者
Tokyo中高生Webサイト 制作メンバー

原田 ほのか さん (高校二年生)

世界陸上の代表選考会を兼ねた日本選手権にて取材を実施。東京2025世界陸上の魅力を発信した。

👉大会で学んだ“支える努力”

私は日本選手権でこども記者として、日本陸上競技連盟会長の有森裕子さんや大会関係者の方々へインタビューを行い、試合の迫力や選手の活躍だけでなく、大会を支える多くの努力に触れました。

取材を通して実感したのは、「一つの大会は多くの人力で成り立っている」ということです。大会関係者の方々がそれぞれの役割を全力で果たしており、その努力があってはじめて大会が成功するのだと気づきました。会場設営や通訳、ボランティアの方々の仕事を通じて大会を支える“見えない努力”を間近で体感し、表に見える結果だけではない、それらを支える努力の大切さを学びました。

また、印象に残っているのは有森会長の「(選手たちは)ライバルでありながらも、お互いに尊重し合い、共に成長しようとする」という言葉です。世界で戦う選手たちの、自分たちの競技相手を“敵”ではなく“同じ目標を目指す仲間”として、励まし合い高め合うという精神に、私もそうありたい、そうした姿勢を大切にしたいと強く思われました。

これからの学校生活では、行事や委員会活動などで“表に出る人”だけでなく、“支える人”の努力にも目を向けたいです。また、チーム全体で協力しながら一つの目標に向かう姿勢を大切に、どんな場面でも周りを見て行動できるようになりたいと思います。



【デフリンピック】こども記者プログラム参加者
Tokyo中高生Webサイト 制作メンバー

老山 隼人 さん (中学三年生)

こども記者として、女子バレーボール日本代表の初戦を観戦。大会終了後に選手の一人である長谷山選手に取材することを通じ、共生社会への理解を深めた。

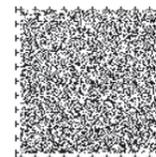
👉観戦と取材を通じて触れた「きこえない・きこえにくい」

私はこども記者として、女子バレーボール日本代表の試合を観戦しました。デフスポーツの観戦は初めてでしたが、試合中に多くの方々が「サインール」で応援していた姿はとても印象的で、日本代表が勝利を収めたときは自分の応援が届いたように感じ、とても嬉しかったです。

また、大会終了後には日本代表の一人である長谷山選手に取材を行いました。長谷山選手とは手話言語通訳を挟んで話すということで、コミュニケーションに不安を感じていましたが、手の動きや顔の表情を通じてコンタクトを取ることができました。取材で聞くことができた「自分の好きを突き詰めることで、プロへの道が拓ける」という話には、とても心を動かされました。

今回の体験を通じて学んだことは、耳がきこえないこと以外、私たちと「きこえない・きこえにくい」人々は変わらないということです。手話言語といっても、手だけでなく口や体全体を使いますし、スポーツに打ち込む姿や普段の生活など私たちと重なる部分がたくさんあると気が付きました。これまで聴覚障害についてよく知らず、漠然と「自分とは違う」人々だと思っていましたが、今回そうでないことを知れて本当に良かったです。

今後も様々な人と会うと思いますが、今回の学んだことを活かし、普段から相手のことを理解し交流するよう努めていきたいです。



実際の記事はこちら

Topic

実際の取材の様子やインタビューが記事になり 世界陸上大会公式ウェブサイトで公開された



中高生が有森裕子さん・小山直城選手を直接取材！

マラソンメダリスト・有森裕子さん マラソン日本代表・小山直城選手に中高生が取材 — 東京2025世界陸上の魅力を発信

東京2025世界陸上取材は、東京都が進める「中高生Webサイト（仮称）」の取組に連携し、中高生による東京2025世界陸上報道の取材を実施しました。

取材に参加したのは、中高生12名。彼らは、国立競技場で行われた第109回日本陸上競技選手権大会、東京都庁で開催中の「東京2025世界陸上ワールドアスレティクス・ミュージアム（MOWA）」を訪れ、有森裕子さんや小山直城選手らに直接インタビューを行い、東京2025世界陸上の魅力を探りました。

この記事では、中高生が東京2025世界陸上の注目ポイントや大会準備の裏側を取材した様子をお届けします。

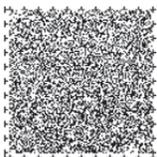
・[山形県立（山形）女子商業学校](#)はこちらから！

取材に参加した中高生メンバー

・2025年7月5日（土）第109回日本陸上競技選手権大会・国立競技場
・2025年7月6日（日）東京2025世界陸上ワールドアスレティクス・ミュージアム（MOWA）・東京都庁



りっせん記者（中学3年生）、オイヤン記者（中学3年生）、こうしん記者（中学3年生）、まさき記者（中学3年生）、しずな記者（高校2年生）、のんのん記者（高校2年生）



世界陸上はトップ・オブ・トップの戦い マラソンメダリスト 有森 裕子さん



日本陸上競技選手権大会が開催されている国立競技場に伺い、有森裕子さんにインタビューを実施しました。有森さんは、1991年の世界陸上東京大会などに出場されており、日本陸上競技連盟の会長に就任した今年、再び東京で世界陸上が開催されることに対する思いを語りました。

りっせん記者：1991年の世界陸上東京大会出場時の思いを聞かせてください。

有森さん：1991年の世界陸上は私にとって初の日本代表戦でした。世界から集まった選手たちは終わった後に握手やハグをして自分が負けても勝った選手に“おめでとう”を言っていました。世界で戦う選手は敵というより同志。ライバルではあってもスポーツを通して自分を前進させてくれる、そういう存在なんだと教えてもらった大会であるとともに、1つの競技で競うことを通じて人間として大事な繋がりができる、その大切さを教わった大会でした。

オイヤン記者：世界陸上は陸上選手にとってどんな大会だと思いますか？

有森さん：世界陸上は記録によって出場できる枠が決まっているので、出場できない国もある。まさに世界のトップ・オブ・トップの戦いで、本当の意味で陸上の世界一を決める大会です。

しずな記者：アスリートとして、陸上競技のどの部分に魅力を感じていますか？

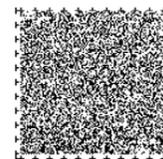
有森さん：私はスポーツが生きることにもたらすエネルギーに興味がありました。高校から陸上部に入って一生懸命競技を頑張る中で、自分自身がどんどん変わっていきました。陸上というものが生きる力を促してくれると実感しました。

未来へ つなぐ

両大会が「未来へつながる大会」として、今後の国際大会のモデルとなるよう、持続可能性に配慮した取組、共生社会実現に向けた取組を推進しました。

➤ Action 7 「みんなで守る、みんなの環境」

➤ Action 8 「共に生きる未来を創る」





大会を通じて持続可能な社会への歩みを加速

両大会を環境に配慮した大会とするため、先進技術も活用し、脱炭素化や3Rを推進するとともに、それらの取組を広く発信。環境負荷の少ない持続可能な大会運営を推進するとともに、先進技術の普及や都民の行動変容を促進するなど、大会を通じて、持続可能な社会への歩みを加速させた。



環境に配慮した大会運営を推進



環境先進技術を活用し、普及を促進



両大会において省エネや3R（リデュース・リユース・リサイクル）、再エネ活用等の取組を推進



© WCH Tokyo 25

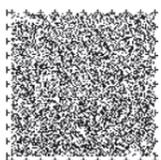


東京2025世界陸上とサステナブルな未来へ
家庭の油で飛行機を飛ばそう

ご家庭で使い終わった油が飛行機の燃料に変わります
 廃食用油の回収にご協力をお願いします

東京2025世界陸上 © WCH Tokyo 25

持続可能な航空燃料「SAF」や次世代型太陽電池「Airソーラー」などの環境先進技術を効果的にPRし、普及を促進



TOWARD2025 (取組と実績)

環境に配慮した大会運営

世界陸上における取組

- ・持続可能性に配慮した大会の実現に向け、「東京2025世界陸上サステナビリティプラン」を策定し、省エネや3Rの推進、再エネ活用など、環境負荷低減に向けた取組を推進
- ・大会関係者や選手の移動に、燃料電池自動車等の低環境負荷車両を活用
- ・放送事業者用の仮設発電機に100%バイオ燃料を使用。100%バイオ燃料としては国内最大級の規模となる60,397Lを使用
- ・メダルケースには持続可能性の観点から多摩産材を使用



© WCH Tokyo 25

持続可能性に関する評価基準で最高評価を獲得【世界陸上】

ワールドアスレティクス(WA)が定める大会の持続可能性を評価するABW基準において、東京大会が、世界陸上大会としては初となる最高評価のプラチナレベルを獲得。SAF・Airソーラーといった環境先進技術活用や、子供たちの大会参画、セーフガーディングの取組(p.37)などを高く評価された。



デフリンピックにおける取組

- ・開催基本計画において環境に配慮した大会運営を目標として掲げ、脱炭素化と3Rの取組を推進
- ・表彰式で使用する表彰台やメダルトレイをリサイクル可能な材料で製作。メダルケースには多摩産材を活用
- ・人や社会、環境のことを考えた「エシカル消費」の普及・啓発のため、子供観戦事業の参加者とボランティアを対象に、環境に配慮した素材で制作したグッズを配布し、エシカルな行動を促進。ボランティアにはマイボトル等を配布することで、大会におけるプラスチック削減にも貢献
- ・デフリンピックスクエアにおいて、次世代型太陽電池「Airソーラー」で発電した電気を、選手交流エリアの提灯の明かりとして活用



©(公財)東京都スポーツ文化事業団



©(公財)東京都スポーツ文化事業団

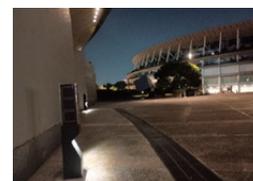


©(公財)東京都スポーツ文化事業団

環境先進技術の普及促進

持続可能な航空燃料「SAF」の原料となる廃食用油の回収キャンペーン

- ・世界陸上を契機に、SAF (Sustainable Aviation Fuel) の原料となる廃食用油を家庭等から回収するキャンペーンを区市町村等と連携して実施。都内約80か所に回収所を設置するとともに、アスリート等を活用したPRにより、多くの都民参画を促し、羽田～ニューヨーク間片道分に相当する約11,300Lの廃食用油を回収。選手等の移動に伴うCO2削減に貢献するとともに、SAFの認知度向上や都民の行動変容を促進



次世代型太陽電池「Airソーラー」の活用及びPR

- ・「薄く、軽く、曲がる」という特徴を持った日本生まれの次世代型太陽電池「Airソーラー」の普及促進・社会実装に向け、国立競技場の周辺にAirソーラー搭載の庭園灯を設置し、活用及びPRを実施



環境先進技術のPR

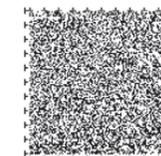
- ・世界陸上において、アスリート等を起用し、SAF・Airソーラー・バイオ燃料・ボトルtoボトルに関する動画を制作・配信し、PR



© WCH Tokyo 25

世界陸上における暑さ対策

- ・国立競技場周辺や路上競技治道において、冷風設備を備えた休憩所の設置、暑さ対策グッズの配布、ミストクルーの巡回等を実施し、来場者の熱中症予防を徹底
- ・東京2020大会時に製作した「かぶる傘」をスタッフが着用するとともに、来場者への貸出を実施
- ・スタートアップと協働して最新技術を活用





共生社会の実現に向けた歩みを加速

障害の有無にかかわらず、互いの違いを認め、尊重し合う共生社会の実現に向け、大会を通じて多様性の大切さを発信するとともに、様々な人が共にスポーツを楽しみ交流できる取組等を展開。多様性や共生社会への理解を幅広い層に広めるとともに、スポーツを通じて人々の相互理解の醸成が図られるなど、大会を通じて、共生社会への歩みを加速させた。

大会を通じ、多様性や共生社会の理解を促進



スポーツを通じて相互理解を醸成



大会の気運醸成の取組を通じて手話言語やろう者の文化に触れる機会を創出



多様な人々が共に大会を創り、スポーツを楽しむことを通じて、新たなつながりや相互理解が醸成

TOWARD2025 (取組と実績)

多様性や共生社会への理解促進

大会のPRを通じた発信

- ・両大会の特設サイト「TOKYO FORWARD 2025」において、アスリートをはじめ、社会で活躍するきこえない人等74人をインタビュー形式で紹介
- ・デフスポーツや手話言語に理解のある人などを「東京2025デフリンピック応援アンバサダー」として起用し、大会PRを通じてメッセージを発信
- ・気運醸成イベント等において、デフスポーツや手話言語に関するプログラムを実施
- ・手話単語に触れるきっかけにしてもらうことを目的に、ダンス楽曲「しゅわしゅわ☆デフリンピック!」を制作。著名人にダンスを踊ってもらい、その動画をSNSを通じて広く発信



大会を契機とした啓発イベント等の推進

- ・聴覚障害及び手話言語への理解促進を図るため、啓発イベントや手話言語初学者向け学習冊子の制作・配布を実施
- ・手話言語通訳者及び手話言語のできる都民を養成するための研修会等を実施。令和7年度より、専門分野研修を実施し、医療・スポーツ・芸術文化における手話対応力向上を推進
- ・ファミリー層や若者が集う商業施設において障害理解に関する啓発イベント等を実施し、幅広い層の人の理解を促進
- ・心のバリアフリーの理解促進に向け、ポスターコンクールやホームページによる情報発信など効果的な普及啓発を実施
- ・多くの人にとって分かりやすく、伝わりやすい「やさしい日本語」の普及に向け、イベントや事例集等の作成・配布を実施



世界陸上における多様性等に関する取組

- ・職員には多様な人材を採用するとともに、差別の禁止や人権・個性の尊重について行動規範で規定
- ・アスリート・スタッフ・ボランティア等陸上競技にかかわる全ての人が安全で前向きに大会に参加できるよう、セーフガーディングポリシーを策定し、アスリート等への誹謗中傷や写真・動画による性的ハラスメントの防止等について普及・啓発を実施

スポーツを通じた人々の交流促進

目でみる応援“サインエール”を開発

- ・きこえない・きこえるにかかわらず、誰もが視覚的に応援を届けることができる「サインエール」を、ろう者やデフアスリートと共に開発。デフサッカー男子日本代表エキシビジョンマッチや世界陸上でもサインエールで応援するなど、様々な機会を捉えて幅広く普及。デフリンピック大会時には、多くの観客がサインエールで選手を応援



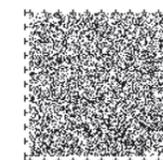
大会やスポーツを通じた人々の交流

- ・デフリンピックやデフスポーツ等への関心を高めるため、アスリートとの交流やデフスポーツ等の体験が楽しめるイベント「スポーツFUN PARK」を開催。大会観戦や応援に役立つブースも出展。3日間で延べ約14万人が来場
- ・デフリンピック大会時、選手等の交流拠点となる「デフリンピックスクエア」において、デフスポーツやろう者の文化への理解を深めるコンテンツなど、多様な人々が一緒に楽しめる多彩なプログラムを実施。57,168人が来場
- ・障害の有無や年齢、国籍などにかかわらず、多様な人々がボランティアとして活躍
- ・デフリンピックの開閉会式は「コミュニケーションを楽しもう」をベースコンセプトに、ろう者の文化の共有、東京・日本の魅力発信、共生社会の実現をテーマに実施。子供や障害のある方など多様な人々が参画・出演



全日本ろうあ連盟 石橋理事長のコメント

東京2025デフリンピックが残す最大のレガシーは、“誰もが個性を活かし、力を発揮できる”共生社会の実現です。きこえない人ときこえる人が共に対等に取り組んだ大会運営の形は、まさしく共生社会のモデルといえるものです。



Voice



多摩市環境部資源循環推進課長

星野 正春 氏

「多摩市一般廃棄物処理基本計画」に基づき、ごみの減量と資源化の取組を推進

🎯 大会を契機に広がる資源循環の輪 —「家庭の油回収キャンペーン」との連携—

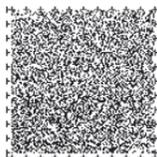
本市では、市民の皆さんがエコ活動に参加しやすい環境を提供することを目的に、東京都が世界陸上を契機に行う「家庭の油 回収キャンペーン」と連携し、廃食用油の回収事業を開始しました。

多くの方に取組を知っていただくよう、市内の駅周辺の公共施設やスポーツ施設を回収拠点とすると共に、市ホームページでの広報や、世界陸上のマスコットが描かれた啓発用の缶バッジをイベントで配布するなどの周知活動を行っています。

こうした工夫もあり、非常にたくさんの廃食用油が集まっています。高齢化が進んだこともあり、お中元やお歳暮でもらった食用油を未開封のままお持ちになる方が多くいらっしゃいます。

家庭で使われた食用油が航空燃料にリサイクルされることは、市民の皆さんにはインパクトがあるようです。今回、世界陸上の開催気運に合わせて、この取組を実施したことは、資源循環の啓発という意味でも有効だったと思います。

今後は、民間事業者の取組なども紹介しながら、市のイベント「エコフェスタ多摩」でも廃食用油の回収を行う予定です。こうした取組を引き続き推進し、環境負荷の少ない循環型のまちづくりを進めていきます。



手話アーティスト

西脇 将伍 氏

デファスリートへ届ける新しい応援のカタチ『サインエール』の制作を主導

🎯 国や文化を超え、人々をつなげた『サインエール』のちから

『サインエール』は、多くの人にとってのコミュニティから生まれる表現や文化の魅力を伝えたいと思い制作にあたりました。アスリートからは「今までにない体験」「観客とのつながりを強く感じた」などの声があり、応援する側からも「一緒に競技しているようだった」「会場の一体感が素晴らしかった」という反応がありました。

こうした新しい体験や感覚、そして感動は、サインエールがあったからこそ生まれたものであり、大きな一歩になったと感じています。応援団がいなくても一般の方が自発的に盛り上げたり、SNSで広がる様子を見て胸が熱くなりました。国や文化を問わず多くの人に受け入れられ、サインエールが人々をひとつにする力、そしてデフパワーの可能性を強く感じました。

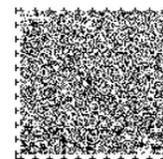
大会を通じて、デファスリートへの注目も増加し、社会的地位の向上につながったと感じます。ろう・難聴の子供たちにも『アスリート』という新しい選択肢ができました。そして、サインエールは、例えば、舞台前に緊張している人へ送るなど、ろう者のコミュニティの日常でも自然に使われ始め、コミュニティの活性化にも貢献しています。また、大会の中でもありましたが、以前はきこえる人が担うことが多かった役割を、最近ではろう者・難聴者自身が当事者として担う流れができました。この変化は共生社会に向けた前進であり、デフリンピックを通じて、社会全体にろう者の文化や手話言語が確実に浸透したと強く感じています。

真の共生社会に向けては、ろう者・難聴者も社会の中で役割を担い、きこえる人と共に社会を形作ることで実現すると感じました。違いを超えて支え合える社会が広がることを願っています。私も表現者・当事者として、その実現のためにできることを考え取り組んでいきたいと思っています。

みんなで作る

両大会がもたらす価値を、多くの都民・国民と共有し、その価値を最大化するため、様々な人々の参画を促す取組を展開しました。

- ▶ Action 9 「Make it together 2025」
- ▶ Action10 「知って、楽しんで、応援しよう！」





多くの人々とともに大会を創り上げた

多くの都民・国民と共に大会を創り上げるため、東京2020大会のレガシーを継承・発展させたボランティアの取組をはじめ、様々な人々の参画・連携を促進する取組や仕組みづくりを推進。多くの都民や団体が大会にかかわり、共に協力して大会を創り上げ、ボランティア文化のさらなる定着や新たなつながりの創出につなげた。



多くのボランティアが大会を支えた

©(公財)東京都スポーツ文化事業団



©(公財)東京都スポーツ文化事業団



© WCH Tokyo 25



様々な人々が参画し、みんなで大会を創り上げた

子供や学生がロゴやエンブレム制作に参画



会場に来場できない人もデジタル技術を活用し遠隔参加

東京2020大会のレガシーも活用して募集を行い、両大会合わせて約6,000人がボランティアとして参加。多様な人々がボランティアとして大会を支えた



© WCH Tokyo 25

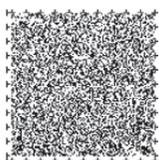


全国の自治体と連携し大会を盛り上げた



©(公財)東京都スポーツ文化事業団

多くの人や企業と大会を創り上げた



TOWARD2025 (取組と実績)

▶ ボランティア文化の一層の定着

■ ボランティアの気運醸成

- ・東京 2020 大会を契機に開設したポータルサイト「東京ボランティアレガシーネットワーク (VLN)」などを通じて、ボランティア公募情報や大会関連情報を発信
- ・両大会のボランティア参加者にVLNへの登録を促し、VLNを通じてボランティア情報提供を行うことで、大会終了後の継続した活動を促進

■ 多様なボランティアの活躍機会の提供

- ・障害の有無や年齢、国籍などにかかわらず、多様な人々がボランティアとして活躍できる機会を創出
- ・世界陸上では2,858人が、デフリンピックでは2,959人が参加し、それぞれ競技会場等における選手等の案内やIDチェックなど、多彩な活動を実施。ボランティアには外国の方や手話言語対応が可能な方も数多く参加し、大会における来場者等との円滑なコミュニケーション等を支援。多様な人々が協働しながら大会の成功を支えた (申込人数：世界陸上8,276人、デフリンピック18,903人)



© WCH Tokyo 25



© (公財)東京都スポーツ文化事業団



ボランティア参加者の声

きこえない人・きこえる人が共に協力して活動できた。チームワークが素晴らしく、充実した日々だった。

▶ 世界陸上のボランティアのうち98%、デフリンピックボランティアのうち96%が、大会後の継続的なボランティア活動を希望 (各大会において、活動終了時に実施したアンケート調査より)

▶ 多様な人々の参画

■ 現地観戦が困難な障害のある方等の参画

- ・現地観戦が困難な障害のある方等が、分身ロボットを活用して、福祉施設や医療施設にしながら操作用タブレット端末を操作して、競技観戦や競技体験、現地にいる来場者との交流などに遠隔で参加



■ 大会ロゴやメダルデザイン等への都民参画

- ・大会のシンボルとなる大会ロゴや大会エンブレム、公式マスコット、メダルデザインの制作に、アスリートや障害のある人、子供たちなど様々な人々が参画



© (公財)東京都スポーツ文化事業団

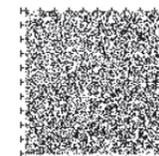
■ 寄附・協賛の環境整備

- ・デフリンピックにおいて、より多くの人々や企業等が参画し、一緒に大会を創り上げていけるよう、寄附・協賛の環境を整備。1,563件の寄附、160者の協賛が集まった
- ・協賛者の獲得や連携の推進に向け、協賛企業・団体交流会を開催 (全3回実施)



■ 自治体等と連携した大会の気運醸成

- ・都内区市町村等と連携し、都民に身近なイベントへのPRブース出展を令和5～7年度で300回以上実施するとともに、自治体広報誌を通じた情報発信を実施
- ・大会の気運醸成に資する区市町村のスポーツイベント等への支援を行い、各自治体と一体となって東京全体での開催気運を醸成
- ・全国の自治体等のキャラクターによる「東京2025デフリンピック応援隊」を結成、176体のキャラクターが参加し各地で大会に向けた気運醸成やデフアスリート応援を実施
- ・デフリンピックの開催に向けて、会場自治体と連携したカウントダウンツアーを実施。応援の想いを込めた折り鶴を入れたカウントダウンモニュメントが、すべての会場自治体を巡り、各地の気運をさらに盛り上げ
- ・デフリンピックや手話言語を見て、知って、体験する全国キャラバン活動が47都道府県で実施され、全国的な啓発促進、気運醸成が図られた





大会を推進力にスポーツフィールド・東京の実現へ

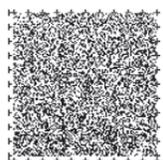
多くの都民・国民が大会に関心を持ち、みんなで大会を楽しみ、盛り上げられるよう、大会やスポーツ気運を高めるための取組を幅広く展開。多くの都民の参加を促進することで、大会を通じて多くの人にスポーツの魅力を伝えるとともに、デフスポーツの振興も促進するなど、スポーツの裾野をさらに広げた。



大会の節目等を捉え様々な広報やイベントを展開



高まるスポーツ気運を捉え、様々なイベント等を通じてスポーツに触れる機会を創出



大会への関心を高め、多くの都民・国民と大会を盛り上げた
 > 世界陸上には約62万人、デフリンピックには約33万人が来場

デフリンピックに向け、選手や競技団体の活動などを支援し、大会での活躍を後押し。史上初めて全ての競技で日本選手が出場を果たした

TOWARD2025 (取組と実績)

👉 みんなで大会を盛り上げる

■多様な媒体を活用した大会のPR

- ・両大会の特設サイト「TOKYO FORWARD 2025」により大会の意義や魅力を効果的に発信。「TOKYO FORWARD 2025」公式インスタグラムでは、サイトと連動して両大会の魅力を伝えるとともに、都のスポーツに関するXの公式アカウントでも大会関連のイベント情報などをタイムリーに発信
- ・開催1年前などの節目や直前期などを捉え、広報東京都での特集記事や都庁舎プロジェクションマッピング、交通広告やSNS、雑誌など様々な媒体を活用した広報プロモーションを展開
- ・「パラスポーツの振興とバリアフリー推進に向けた懇談会」において両大会をテーマとした意見交換を行うとともに、メンバー（パラ応援大使）を通じて幅広い層へ情報発信



■大会の気運醸成イベントの開催

- ・節目の機会を捉えて、アスリートや東京2025デフリンピック応援アンバサダー等を招き競技体験など誰もが楽しめる気運醸成イベントを開催し、両大会への期待感を醸成
- ・世界陸上の期間中には、会場周辺等で大会を盛り上げるイベントを開催し、国際大会ならではの賑わいを創出

主なイベントと来場者数 (延べ)



東京2025世界陸上
1 Year To Go!
約14,000人



東京2025デフリンピック
1 Year To Go!
約17,000人



TOKYO FORWARD
2025 for世界陸上
10万人以上

→都内区市町村など関係機関とも連携しデフリンピックの気運醸成に取り組んだことにより、都内認知度はR5の14.8%から、R6には39.0%、大会後(R7)には73.1%へと向上

👉 大会を契機としたスポーツ気運醸成

■多種多様なスポーツに触れる機会の創出

- ・両大会にあわせ開催した様々なイベントにおいて、誰もが気軽に楽しめるスポーツ体験や、アスリートを招いたトークショー、選手交流など多彩なプログラムを展開。大会時には、特別支援学校を活用しパブリックビューイングも実施
- ・世界陸上の開幕前日に、普段は走ることでできないKK線(旧東京高速道路)において、多彩なランニング体験イベントを開催し、2,283人が参加
- ・世界陸上の期間中に100mのエキシビションレースを実施。平均年齢86歳のマスターズ、パラリンピック選手、デフリンピック選手、全国から集まった中学生それぞれのアスリートが国立競技場の観客の前でパフォーマンスを披露し、感動と興奮を共有

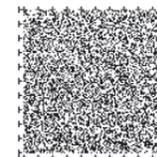


■デフスポーツの推進

- ・日本パラリンピック委員会に加盟するデフスポーツ中央競技団体等が都内で実施する強化合宿や普及啓発等を支援。令和5~7年度で21団体を支援
- ・デフリンピック出場を目指す東京にゆかりのある選手を「東京ゆかりパラアスリート・東京デフアスリート」として認定し、活動を支援。令和4~7年度で99人を認定し、うち61人が大会に出場
- ・中央競技団体が無い等の理由により選手の発掘・強化が進んでいなかった4競技(ハンドボール、射撃、テコンドー、レスリング)について、大会前年に、全国から有望な選手を発掘するためのチャレンジトライアウトを実施。参加者から10人がデフリンピックに出場、当該競技での日本選手出場は史上初であり、初めて全ての競技で日本選手が出場した
- ・東京にゆかりのある出場選手84人を紹介する「東京ゆかりデフアスリート応援サイト」を大会に向け開設。本人コメントのほか、出場スケジュールや試合結果をタイムリーに掲載し、選手への応援を促進
- ・東京ゆかりのデフアスリート等の出場・活躍が期待される5競技の予選日程について、大会公式の競技配信に加え、都内ケーブルテレビとYouTubeで実況・解説・手話言語通訳付きで中継・配信を実施。デフリンピックへの関心喚起と観戦促進につなげた



©(公財)東京都スポーツ文化事業団



Voice



デフアスリート (陸上)

山田 真樹 選手

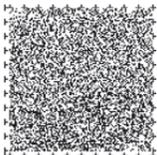
東京2025デフリンピックでは、400mと4×400mリレーで金、200mで銀と計3個のメダルを獲得

👉 デフリンピックが進めた共生社会への歩み

デフリンピックの開催が決まった当初、認知度は非常に低く、このままでは“誰にも届かない大会”になってしまうという危機感がありました。自国開催である以上、デフアスリートの存在を広く知ってもらいたい。その思いから、大会に向けた気運醸成やPR活動に取り組んできました。

大会には想定約3倍もの来場者が訪れてくださいました。デフスポーツに初めて触れた方も多かったと思います。開発に関わった『サインエール』も、これまでにない“見える応援文化”として、会場全体に一体感を生み出してくれました。

この大会がもたらした最大の価値は、“見えない障害”への理解が一步進んだことです。デフリンピックを通じて、多くの方が初めて“きこえない人の日常”に触れ、“きこえないこと”を理解しようとする気運が高まり、コミュニケーションに対する姿勢が変わったと感じています。会場では手話言語や筆談、身振りによるコミュニケーションが自然に行われ、街中でも手話言語が交わされる場面が増えました。私自身も、活動を通じて多くの方が手話言語で「ありがとう」と伝えてくださったことが特に印象的で、“ひとつの言語”として受け止められ始めたことを実感しました。



共生社会は特別な取組ではなく、一人ひとりの小さな姿勢から生まれるものです。私はこの大会の『顔』で終わらず、社会に向けた発信をこれからも続けていきたいと考えています。



日本陸上競技連盟会長

有森 裕子 氏

ワールドアスレティックス カウンシルメンバー(理事)

👉 マザー・オブ・スポーツが示したスポーツの価値

スポーツには、人や社会がより良く、健康に、平和に繁栄したいという“生きる力”を促す要素があると考えています。今回の東京2025世界陸上を通じて、改めてその価値を実感しました。

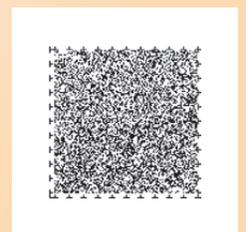
東京2025世界陸上では、テクノロジーやAIが進化する現代にあって、人間の“生身の体”が生み出す根源的な行為の価値が再認識されたと感じています。“走る・跳ぶ・投げる・歩く”という人間の根源的な動作を競う『マザー・オブ・スポーツ』の陸上競技として、身体の持つ可能性、身体を動かすことの素晴らしさを、リアルに感動とともに届けることができたのではないかと思います。実際に観戦が初めてという方々から「もう少し、自分の身体を動かしてみようと思った」という声を多くいただきました。

この大会を通じて、陸上競技が『マザー・オブ・スポーツ』として社会的に持つ意義や意味、その可能性の“のびしろ”を強く感じました。これからも、競技を“行い”“観せる”だけでなく、スポーツが持つ意味や意義を多角的に捉え、それも踏まえた活動を行っていくことが重要だと思っています。東京2025世界陸上を経て改めてそう感じています。

Legacy

TOKYO FORWARD 2025

両大会を通じて創出されたレガシー



世界陸上

都内小学4年～6年生
延154校 約1万人
子供たちが国立競技場のトラックを走る体験

約4.9万人
(引率者含む)
子供たちを国立競技場に観戦招待

都内小学4年～6年生
約34万部
陸上競技の解説や上達するトレーニングを紹介する冊子を制作・配布

2,858人
大会を支えたボランティア

約11,300L
回収キャンペーンで集まったSAFの原料となる廃食用油

大会史上初の
最高評価獲得
WAが定める大会の持続可能性を評価する基準

デフリンピック

73.1%
デフリンピックの認知度
2023年の14.8%から大幅に上昇

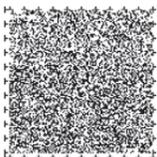
約5万人
(引率者含む)
子供たちが観戦等に参画

都内小学4年～6年生
約47万部
デフリンピックや手話言語について学べる冊子を制作・配布
※2か年にわたり配布

2,959人
きこえない人もきこえる人もボランティアとして参画

6社172駅
鉄道駅にユニバーサルコミュニケーション技術導入

160者
大会を共に創り上げた協賛者



Legacy

両大会を通じた多様な取組は、東京に多くの成果をもたらした
こうした成果をレガシーとして、今後のスポーツ施策につなげていく

こどもたちが“スポーツの力”を実感

子供たちをはじめ多くの都民が、大会や関連イベントに参加し、スポーツに触れることで、夢や希望を育み、その楽しさや素晴らしさを実感



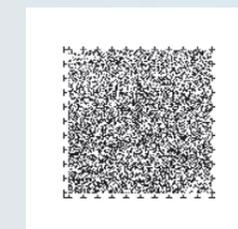
新たな技術と相互理解を通じ、人々がつながる共生社会への歩みを加速

大会や大会を契機とした取組を通じて、国籍や障害の有無に関係なく、互いに思いやりを持ち、すべての人が安心して生活できる共生社会の実現に向けた歩みを加速



今後の国際スポーツ大会の新たなモデルに

東京2020大会の経験も活かし、大会運営組織や庁内各局と連携しながら様々な取組を推進し、今後のスポーツ大会のモデルとなるようなあり方を示した



こどもたちが“スポーツの力”を実感

子供たちをはじめ多くの都民が、大会や大会関連イベントなどを通じてスポーツに触れ、体感することで、夢や希望を育み、楽しさや素晴らしさを実感した。



かけがえのない体験

- ・子供たちを競技観戦に招待し、スポーツの素晴らしさや夢と希望を届けた
- ・国立競技場での陸上競技体験やアスリートとの交流など子供たちがスポーツを好きになる機会を提供
- ・世界陸上で競技開始前の大勢の観客が入った会場で、全国大会入賞者の中学生等がエキシビションレースを披露、感動と興奮を共有

大会への参画

- ・メダルセレモニーやエスコートキッズなどで子供たちが運営に参画
- ・大会ロゴやマスコットなどの制作に、子供など様々な人々が参画



学び・理解促進

- ・陸上競技の解説や上達するトレーニングを紹介する冊子を制作・配布
- ・デフリンピックや手話言語について、漫画形式で学べる学習ハンドブックを制作・配布
- ・きこえない・きこえるにかかわらず、子供たちがアスリートと一緒にスポーツを楽しむ体験教室を実施し、共生社会について考えるきっかけを提供

Topic 子供参画の取組に対する表彰【世界陸上】<大会史上初>

世界陸上に子供が参画する取組に対して、ワールドアスレティックス(WA)から、東京都・世界陸上財団・日本陸上競技連盟に表彰状が贈られた。

WAコー会長のコメント

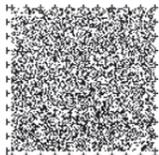
「世界陸上の目的のひとつは、長く続くレガシーを残すことにあります。今回子供たちが経験できる機会、また将来の夢を描くチャンスを与えてくださり感謝いたします。」



今後の取組の方向性

子供たちがスポーツの魅力に触れ、“スポーツの力”を実感することで、夢や希望を育み身体を動かす楽しさを積み重ね、「スポーツ好き」な子供であふれる社会を実現していく

- 子供たちにスポーツへの参画機会を多面的に提供し、「スポーツ好き」を醸成
- アスリートとの交流やスポーツ体験などを通じて心身の健全な発達につなげる機会を充実
- スポーツ大会での観戦、参画、交流などかけがえのない体験を提供



Legacy

新たな技術と相互理解を通じ、 人々がつながる共生社会への歩みを加速



大会を通じて人々の障害や共生社会への理解が進み、社会のバリアフリーがさらに進展。互いに思いやり、誰もが安心して暮らせる共生社会への歩みを加速させた。

技術活用・環境整備

- ユニバーサルコミュニケーション (UC) 技術を競技会場のほか、公共施設、駅やホテルなど街中に整備
- スタートアップと連携し、音の見える化などデフリンピックの観戦時に新しい体験を提供
- 大会前の気運醸成イベントから大会期間中も含め、多くの人にUC技術を体験してもらう機会を設け、その有用性を体感



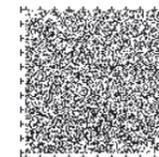
理解促進

- デフリンピックや手話言語について、漫画形式で学べる学習ハンドブックを制作・配布
- 大会に向け、きこえない・きこえるにかかわらず、誰もが視覚的に応援を届けられる「サインエール」を開発
- 節目を捉えた気運醸成イベント等で手話言語体験など体験型のコンテンツを実施
- 文化施設をはじめ、様々な施設や団体との連携したキャンペーンを展開し、アクセシビリティ向上の気運を高めた
- デフリンピックに向け国際手話人材を育成
- 大会のボランティア向けに手話言語研修・ろう者の文化等理解研修を実施
- デフリンピックスクエアにおいて、デフスポーツやろう者の文化への理解を深めるコンテンツや、UC技術体験を実施
- 東京2025デフリンピックの大会理念等に共感し、応援していただける協賛者を集め、交流会等の開催により企業同士のつながりを創出

今後の取組の方向性

障害の有無や年齢、性別、国籍問わず、全ての人々が分け隔てなくスポーツを楽しみ、互いを理解・尊重しながら共生社会への歩みをさらに加速させていく

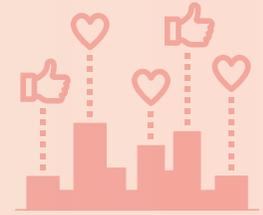
- UC技術をアジア大会、ねんりんピック、開催支援大会ほかスポーツイベント等で積極的に活用
- UC技術の社会実装に向けて、機器の都有施設への配備や公共施設への導入支援を実施
- デフリンピックで生まれたつながり（協賛者など）をパラスポーツにも展開



Legacy

今後の国際スポーツ大会の新たなモデルに

大会運営組織や庁内各局と連携し、東京2020大会の経験も最大限に活かしながら様々な取組を推進し、今後のスポーツ大会のモデルとなるようなあり方を示した。



大会運営

- ・東京2020大会を経験した職員を大会運営組織へ派遣し、経験や運営のノウハウを継承・蓄積
- ・開催基本計画の段階から都と連携した取組を反映（東京の発展に寄与・都民参画の確保）
- ・都のガイドラインや有識者会議を活用し、ガバナンスを確保
- ・情報公開を徹底的に推進
- ・役員選任や契約調達の会議に外部有識者が参加、資料や議事要旨を公開

都政課題の解決

- ・スポーツ大会の枠を越え庁内各局事業との積極的な連携で都政課題解決に取り組んだ
 - ➔ 観光振興、Tokyo TokyoやEdo TokyoのPR、芸術文化との連携、環境配慮（SAFやAirソラー）、エシカル、スタートアップの活用 等

競技会場

- ・都立スポーツ施設の活用（バリアフリーや情報保障等の充実）
- ・“東京”ならではの魅力となる場所の活用（東京2025デフリンピックのマラソン競技など）

都民参画

- ・大会前から子供をはじめ多くの人が大会に参画できる取組を実施
- ・未来ある子供たちに競技観戦などかけがえのない体験を提供
- ・多くの都民もボランティアとして参画し、大会の成功に貢献



全国への波及効果

- ・東京2020大会の事前キャンプ地の自治体で再び世界陸上・デフリンピックの事前キャンプが行われ、地元と交流を深めた
- 【世界陸上】千葉県：オランダ、三郷市：ギリシャ、福岡市：スウェーデン・ノルウェー など
- 【デフリンピック】神奈川県：ポルトガル、浜松市：ブラジル など
- ・デフリンピックや手話言語を見て、知って、体験する全国キャラバン活動が47都道府県で実施され、各地で気運醸成が図られた



国際ろう者スポーツ委員会（ICSD）コーサ会長のコメント

東京2025デフリンピックは、競技、また準備・設営という部分でもハイレベルな大会でした。私たちICSDは、この大会に十分満足しています。多くの競技関係者からも、素晴らしい大会であったというコメントをいただきました。（2025年11月26日記者会見）

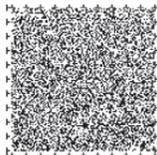


©（公財）東京都スポーツ文化事業団

今後の取組の方向性

両大会の経験をレガシーとして、今後の様々なスポーツ大会の運営に活かし、国際スポーツ大会開催の価値を根付かせ、“スポーツの力”で、都市の更なる発展につなげていく

- ➔ スポーツの「強み」を活かし、庁内各局の施策とも連携しながら、様々な都政課題の解決に向けて貢献
- ➔ 大会の規模や特性に合わせ、これまで継承・蓄積してきたノウハウ・経験、施設など東京が持つリソースを有効活用
- ➔ 国際スポーツ大会を通じた東京ブランド、魅力の発信、都市プレゼンスの向上



東京2020大会



2025年
世界陸上・デフリンピック



その先の新たな
国際スポーツ大会へ

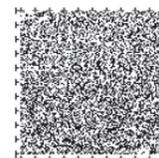
ハード・ソフト両面でのバリアフリーの進展、子供たちの参画、
共生社会への理解促進、ボランティア文化の醸成など、
東京2020大会を通じて生まれたレガシーを継承・発展させ、
両大会の持つ価値を東京の新たな活力につなげた
そのレガシー“バトン”をその先の未来へとつないでいく

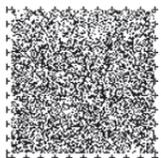
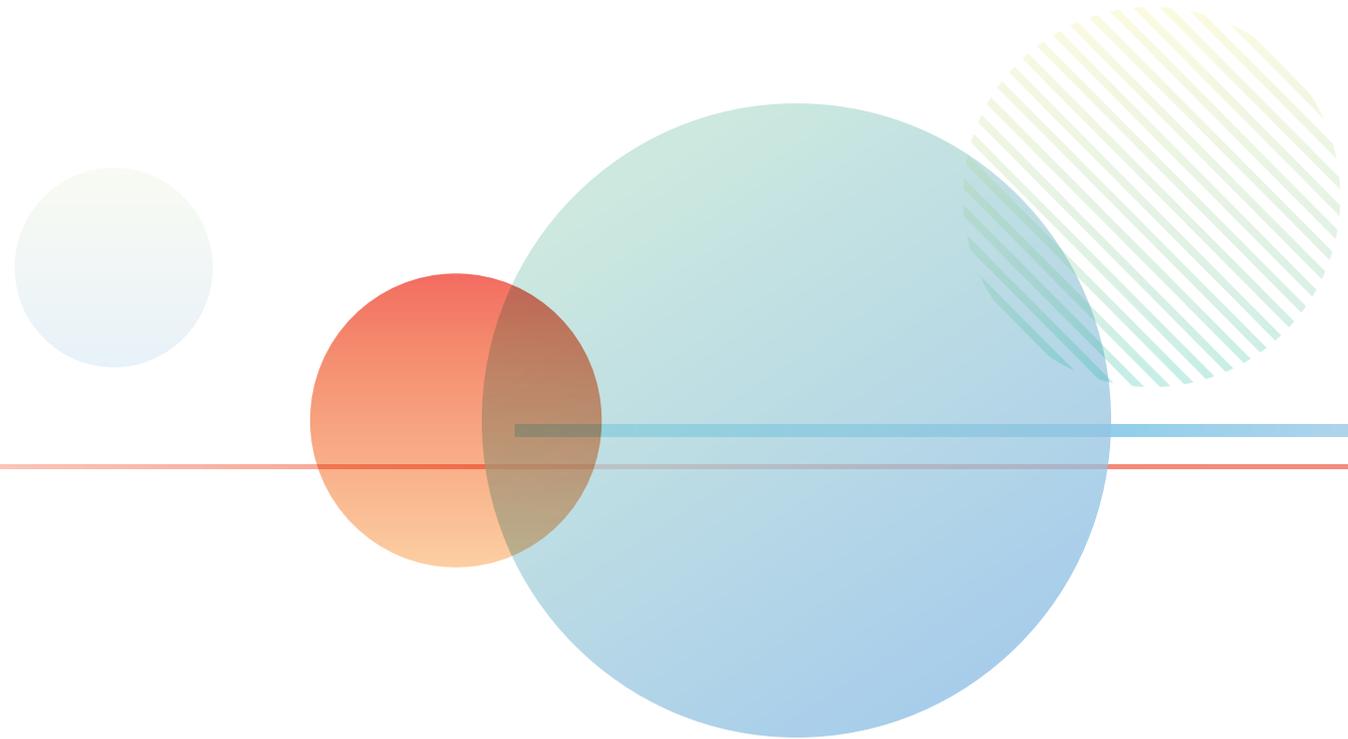


United by the Power of Sports.

— スポーツの力で人々がつながる東京 —

“スポーツの力”で東京の未来を切り拓き、
都民一人ひとりのウェルビーイングを高め、
全ての人々が輝くインクルーシブな街・東京の実現へ





VISION2025 LEGACY BOOK —ビジョン2025 レガシーブック—
令和8(2026)年1月発行

編集・発行	東京都スポーツ推進本部国際スポーツ事業部大会総合調整課 〒163-8001 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号 電話 03-5388-3849 E-mail S1180907@section.metro.tokyo.jp
-------	--